シンガポールにおける華人の社会組織

－海峡植民地期から英領直轄植民地期まで－

福　浦　厚　子

はじめに

これまで調査してきたシンガポールの道教系寺廟は社会政策のなかで様々な立場に置かれてきた。1960年代から70年代にかけては，寺廟の信仰を淫祠邪教として否定的に捉え，この時期に行われた都市再開発に伴って取り壊しが積極的に行われた。1980年代からは，それまでの政策に対する華人からの不満を解消するために，取り壊しの方針は緩められ複数の寺廟を合併，再建させるよう転換が図られた。これについては急速な都市化のなかで寺廟での信仰がなんらかの心のよりどころとなっている点を認め，さまざまな社会的不満や不安に対する一種の安全弁[1)]として機能する寺廟の存在が再認されたとする解釈もなされてきた。しかし，寺廟での活動や信仰のすべてが肯定的にみなされるようになったわけではなかった。いくつかの寺廟を合併させて一つの区画に並列させて移築，再建させることによって，おのおのの寺廟を中心にして確立していた華人の地域コミュニティは解消されることになったし，またそのような再建資金を調達できない寺廟や，それまであった土地での再建に固執する寺廟にとっては結局のところ取り壊されるのを待つしかなかったのである。80年代後半から90年代にかけては，寺廟自体を一種の文化的施設として認め，保存しようと積極的に支持する政策に転じた。とはいえ，古いままではなく改装し建造物としての美観を重視したにすぎず，そこでの活動に対して自由な裁量を与えるもので

1）佐々木宏幹，1988，「華人社会の安全弁としての神教」白鳥，杉本編『伝統宗教と社会，政治的統合』南山大学人類学研究所，p.49-65

はなく，むしろ宗教活動は不自由なものになり，単なる文化のショーケース化が起こったとも言える。多文化が共存した状況を政策として示すことは，現在の時点では建築物という器をリノベーションして視覚的に示すことに留まっている。しかし，こういった政策の側からではなく，寺廟の側から見るならばそこに集う人々の寺廟の生き残りをかけたさまざまな駆け引きがみられる。たとえばキリスト教や仏教が教義宗教としてシンガポールでは協会を設立することによって，これらの宗教の活動は政府から政治的正当性を与えられていると一般的に認識されているのに対して，寺廟の場合は民間信仰ともいえる仏教や道教などが混交した状態にあり，道教自体も教義宗教として確立しているとは政府からみなされていないため，正当性を求めて総会や講演会などがたびたび行われている。

現実に今日の寺廟における宗教儀礼や霊媒によるセアンスの内容をみてみると，かならずしも反社会的と思われる活動ばかりではないことがわかった[2)]。寺廟をめぐって様々な人が集まり，社会集団を形成することで，反権力的活動の温床になるという判断はあまりに短絡的なものでしかない。これまでにも漢民族の社会組織の特徴として指摘されてきたように[3)]，社会集団が常に状況に応じて範囲画定を行うわけで，方言や祖籍地によって形成される集団もそれぞれ一元的なものではないことに注目しなければ，移民社会における個々の集団の分析は十分とは言えない。いったいどのような利害をめぐってどういった範囲で集団が形成されるのか，詳しく検討する必要がある。そこで今回は時代をさらに遡って，19世紀から20世紀初頭にかけて英領植民地シンガポールにおいて，中国大陸から来た移民がイギリス植民地当局との関係のなかでどのような社会結合を行っていたのかを検討することによって，現在の寺廟の社会的役割について考える一助としたい。

2）福浦（根布）厚子，1995a，「シンガポール中国寺廟の問神―依頼者と依頼内容をめぐって―」『東南アジア―歴史と文化―』東南アジア史学会編，No. 24
福浦（根布）厚子，1995 b，「セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格―シンガポールの寺廟の事例から―」『人文学報』京都大学人文科学研究所編，第76号

3）王松興，瀬川昌久，1984，「漢民族の移民とエスニシティー香港・台湾の事例をもとに」No. 48, Vol. 4：406-417

1832年にペナン，マラッカ，シンガポールの三つの植民地は海峡植民地(Straits Settlements)として総称され，1874年からはイギリス植民地政府はそれまでの不干渉政策を改め，本国の権益を守るため干渉政策に乗り出し，1909年にはペナン，マラッカ，シンガポールはそれぞれ直轄植民地となった。本稿では人口が集中しはじめ，移民社会が形成されてイギリス本国が利害に関心をもちだし，政策転換をはかったこの一九世紀後期から二〇世紀初頭にかけての英領直轄植民地シンガポール（British Singapore)期に限定し，華人がどのような社会結合を果たしたのか考察したい。

I　初期移民の時代

一九世紀に中国南部から南洋（東南アジア）へと移民が排出された要因には，人口過剰，洪水や飢饉といった天災や戦争，それから清朝の地方官僚から土地などに重税が課されていたことなどが挙げられる。自分の生まれた土地を離れることをよしとしない彼らが移民をしたのにはそうせざるをえなかった理由があったと考えられる。1700年頃には一億五千万人であった人口は1850年には四億三千万人にと１世紀半に三倍近く増えたことで土地不足とインフレが起こった。また，清代267年の間に，たとえば湖北省では440回の干ばつと1036回の洪水があり，平均して年間5.5回の自然災害が起こっていた[4]。また，阿片戦争やアロー号事件，太平天国の乱などが相次ぎ農業生産も混乱が続き飢饉はますます悪化するという悪循環となった。

当時の東アジアおよびマレー半島一帯にどのように人口移動があったのか，十七世紀まで遡ってみてみたい。1683年に台湾で鄭成功政権が倒れ海外へ人口が大量に流出するきっかけとなり，十七世紀は漢民族による明朝の再興を求め「反清復明」を掲げた秘密結社の成員や新たなビジネス・チャンスを求めた中国人がタイ，マレー半島，リアウ，バンカ，北ボルネオなどに移住しはじめた。そこで当時の康熙帝は海外在住の中国人にも法の適用を求めることにした。1786

4) Yen Ching-hwang, 1986, A Social History of the Chinese in Singapore and Malaya 1800-1911, Oxford University Press.

年にはマレー半島の北西部にあるペナンがイギリス植民地になり，自由貿易政策が敷かれ，植民地行政官のフランシス・ライトが中国人移民奨励策をとった。1814年になるとそれまで世界各国で行われていたアフリカ奴隷交易はthe treaty of Ghentがイギリスとアメリカの間で取り交わされたことで廃止が決まり，1842年から条約が施行されることになった[5]。その代わりにヨーロッパの植民者たちは中国に注目し，南東部に契約港を開くことにした。この前後ももちろん移民は不法という立場ながら自由に中国大陸から東南アジアへと移動していたが，アフリカ奴隷交易が廃止となって以降はそれまでのように自由に移民するというより，むしろ実際には中間にさまざまな利害をもったブローカーが暗躍し，「奴隷」という名称を使わないだけの実質的な奴隷移民の売買（苦力交易）が始まる結果となった。このころ1819年にジョホール帝国の一部であったシンガポールをベンクーレン（北スマトラ）の副総督であったラッフルズ（Thomas Stamford Raffles)がその地の利に注目して，英領植民地とする[6]。この際，土地譲渡交渉はしていなかったので，リアウのスルタン（Sultan Hussein)とジョホールのトムンゴン（代官，Temenggong Abdul Rahman）と行政長官（Senior British administrator）の三人が総督代理（Resident）として，慣習や税収を管理することになったが，のちに1823年になってラッフルズが共同主権（condominium）から主権（dominion）へと変更する。この6月7日の協定では，スルタンらの特別保留地を除いたすべての土地がイギリス東インド会社の所有とされた。翌年には近隣諸島と領海10マイルの所有権も確立，これに対してはスルタン側からの抵抗があったが，東インド会社が定期的に彼らに報酬が支払う[7]ことで抵抗は退けられた。

1511年から1641年までマラッカはポルトガルの植民地であったが，その間ポ

5）1814年12月にベルギー北西部のこの町では1812年から1814年までの英米の戦争終結に伴う講和会議が開催された。

6）1819年以前のシンガポールには沿岸部に海容民ブギスが漁業を営んでいたり，中国人がガンビール栽培を行っていたという記録がある[Thomson, 1991]。Thomson, John, 1991, China and its People, the British Council

7）Lee, Edwin, 1991, The British as Rulers : governing multiracial Singapore1867-1914, Singapore University Press, p. 5-6

ルトガルは「甲必丹」(kapitan) と呼ばれる行政的な責任者を地域ごとにおいて，マレー人や中国人，インド人らの事務処理や紛争処理に対処させた。[8] 1826年にシンガポールなどが海峡植民地となり，シンガポールにも甲必丹制度が敷かれた。はじめ総督はペナンに置かれていたが，1832年からはシンガポールに移された。[9]

「苦力」という言葉は主に中国大陸から東南アジアやアフリカ，南アメリカなどへ安価に取引された労働者のことを指すがその言葉自体は1840年代より以前にはイギリス行政資料のなかにも出てこない。つまり1834年に奴隷交易廃止が実施され，奴隷という言葉が使われなくなってから，それに代わる同義の言葉として「苦力」という語が生まれ，苦力交易が行われるようになったと考えられる。そして1852年には福建省廈門に苦力交易センターが設立され，奴隷並の扱いで取引された苦力の交易はいよいよ本格化される。この当時のシンガポールはまだ東インド会社が統括していたが，1858年に会社がなくなり，海峡植民地は直轄植民地(the British Crown)になり，その監督はロンドンにあるインド行政府 (India Office)が担当することになった。そして1867年に海峡植民地の担当は植民地行政府 (Colonial Office)へと移った。

II　移民の受け入れ組織

自由に大陸から移動していた彼らがブローカーを仲介して「苦力」の名で大量に売買され移動が始められたのはマレー半島一帯で錫鉱山の採掘や，砂糖やゴム，ガンビール・プランテーションの大規模な経営によって急に労働力が必要となったことに起因する。そこで中国人移民の場合，イギリス植民地当局からの直接的な監督ではなく，中国人内部でのさらに細分化された個別の人的管

8) ペナンでも1800年から甲必丹制度を導入し，村の代表でありまた政府への責任をも担わせた。

9) 海峡植民地当局の責任の順位は次のとおりである。(1)シンガポールの総督 (the Governor) (2)総督の委員会 (Governor's council) (3)ベンガル・カルカッタにいる総督，東インド会社のヘッドを兼任 (the Governor) (4)ロンドンにある東インド会社の会長会 (the Court of Directors of the East India Company) (5)ロンドンにある監督庁 (the Board of Control)

理と身分の保障や福利厚生を含む監督を受ける形になった。というのも，たとえば広東省と福建省の出身者では言語的な隔たりが遠く理解が難しく，互いに慣習も異なったため，中国人としてまとまることはほとんど不可能で,祖籍地[10]やさらに大きな結合としては福建，潮州，広東，客家，海南といった五つの地域に分かれていた。

そういった状況下でシンガポールにおいては，実際に苦力が労働力としてそれぞれの任務についている間，異郷での彼らを保護する役目を負っていた組織が三つあったと考えられる。そのまず一つめが擬似的親族関係から展開した互助組織である会館であり，第二には寺廟であり，三つめには秘密結社が挙げられる。これらはいずれも中国人の植民地での社会的な保障，抗争の仲裁，滞在施設の提供，貸付金の保証などの援助を主に行っていた[11]。会館と秘密結社を同等に扱うのは無理があるとの指摘もあった[12]が，Leeの論考でも会館と秘密結社はいずれもメンバーシップが開かれており，成員の保護と交友関係の確立をめざした組織として互いに不可分の関係にあると論じているので，ここでも並列して考えたい。

Ⅲ　会館

同じ地域や同じ姓を持つものなどの移民同士が集まって互助組織をつくったもので，同郷会や宗親会といった組織を指して「会館」と総称する。これにはまた，同業者のギルド組織も含まれるが，ここでは特に同じ地方語集団の組織について論じたい。そもそもこのような組織は中国大陸で漢民族が籍貫と呼ばれる父祖の住み続けてきた地域[13]を単位として親族が集まり，祖先祭祀や互助活

10）出生地でもなく本籍でもないが，父祖が住んでいた地という認識がある。互助組織や祭祀組織がこの祖籍の上に立脚し，「同郷会」を形成している[王，瀬川，ibid:409]

11）Lee Lai To ed. 1988, Early Chinese Immigrant Societies : case studies from north america and british southeast asia, Heinemann Asia, Singapore, p. 7

12）1998年３月に京都大学人文科学研究所における「人類学と植民地」研究班で「英領シンガポール期における華人の社会結合」として本稿に関連する発表をした際に和光大学の中生勝美氏より指摘を受けた。

13）個人の出生地でもなければ，日本の「本籍」の概念とも異なり，数世代もがその地から離れて住んでいても，自分の「故郷」といった認識がなされている地[王, 瀬川, ibid : 409]。

動を行っていることに由来し，それが海外においては親族に限定することができないため，該当する地域を広げたり，実際に血縁関係がなくても同姓であるという点で共通性を求めたりすることで，一種の擬似的な親族組織を作っている。そのため，成員権は比較的広くなっていると言える。会館の活動には大別して三つの役割がある。一つには「落葉帰根」という言葉に見られるように，当時はまだ海外に移民や仕事で出かけても成功すればいずれは帰国するか，万が一海外で死んだとしても遺体は大陸の祖先の元に送り返され，一族の眠る墓地に埋葬されることが前提として考えられていたため，移民たちは渡航した海外で客死し，祭祀の担い手のないまま自分の魂が慰霊されずにさまよいつづけることに恐怖していた。そこで，会館では定期的な宗教行事を開いてそういった死者の魂を慰撫するという宗教的な役割を持っていた。二つめとして，大陸では親族同士で，訪ねてくれば宿泊の機会を提供したり，仕事をあてがったりという関係が当然視されているように，海外でも滞在に不自由がないように無料宿泊所が用意され，仕事探しをしてくれ，医療サービスも行い，死んだ場合は無料埋葬も代行し，会館で葬式までしてくれるような福利厚生の役割も担っていた。三つめには民事事件や債務問題の仲裁に入ったり，家族間で問題が起こった場合や誘拐，暴行事件に対しては微罪法廷も開いていた。このように植民地内では中国人コミュニティに対してある程度の自治権のようなものが認められていたと考えられる。一番最初にシンガポールに会館を開いたのは，S.ラッフルズと一緒に上陸した広東省台山県出身の曹亜珠で，1819年に曹会館を建てている[14)]。

会館の成員になるには会費が必要であったり，年に数回定期的な会合に出席する必要があったりしたため，擬似的な「親族」組織ではあったが，福利厚生等その必要性がある者でも，会員になるのは結局のところ時間的に余裕があるものに限られていた。そういう意味で決して時間的経済的に余力のないものには成員として参加できるものではなく，誰もが成員としてどこかの会館に属している必然性も事実なかった。このことは十九世紀後期に大陸南部からシンガ

14) Yen Ching-hwang, ibid

ポールへと建設労働や家庭内労働従事者として移民してきていた女性労働者の多くが，互助組織として自分たち独自の「斎堂」を建てて活動しながら，決して会館には参加したことがなかったように[15]，会館の場合は所属することにある種の名誉と成員権が付随しており，さらに施設が持つ建物の閉鎖性もまた参加する者を限定する傾向を促したと考えられる。

Ⅳ　寺廟

会館に比べて寺廟の場合，維持費がかからず，そこで行われている宗教活動は信仰として参加することが誰にでも広く開かれていたし，集うこと自体に「姓」や「出身地」などで成員が限定されることもなかった。たいていの寺廟は誰かが最初に移民として大陸を後にする際に携えてきた，出身地で祀られていた超自然的存在としての「神」像や香炉の灰などが祀られており，シンガポールに着いてからは次第にその規模が拡大し，それらを中心にコミュニティが展開したものである。このような像などから寺廟という施設へと発展するには，たいてい信仰の祀り手のなかに経済的有力者のいる場合が多く，信仰の場を中心とした祭祀の担い手たちのコミュニティのなかでリーダーのような者が資金や土地を提供している。たとえばシンガポールに1838年に建てられた「天福宮」は言語の違いを越えて，さまざまな地方語集団のリーダーたちが共同して建てた寺廟であり，天后（媽祖）を中心に観音や関帝を祀っていた。

寺廟ではまた中国人墓地の区画整理があった際に，植民地政府に中止を申し入れるような請願活動をしたり，経済的に困窮している者の師弟を学費無料の学校へ通わせるように融通をしたりといったコミュニティの福祉と行政の業務をも代行したりしていた。さらに会館にもあったような民事の事件を裁いたりする能力のある中国人カピタン[16]の事務所を兼ねている寺廟もあり，法と秩序維

15) Gaw, Kenneth, 1991, Superior Servants: the legendary cantomese amahs of the far east, Singapore:Oxford University Press

16) 1511年から1641年までポルトガルがマラッカを植民地化していた際に「甲必丹(capitan)」を初めて設置し，マレー人や中国人，インド人それぞれに地域の行政事務や紛争に対処させた。ここではカピタン・チナのこと。

持のために代わりに裁いたり，処罰したりするよう政府から業務を委託されていた。寺廟がこのような場として維持されるために，政府から資金を受けたりしていたわけではなく，元来寺廟は公的な場所として誰もが意見交換を容易にできる場所であり，また多くの人々の信仰の場でもあったため，誰にでも近づきやすい性質をもっていたことが指摘されている[17]。

寺廟が誰にでも開かれていたのは，その機能的な側面だけでなく，施設としての建造物の形や出入りする人々の様子からもまた言えることで，広く開け放たれた入り口を絶えず様々な人々が年齢や性別を問わず出入りしていたことが，人の集まりやすさを呼んでいると考えられる。

V　秘密結社

秘密結社は大陸で明朝が倒され清朝ができた際に南部で満族による支配に抵抗する人々が「反清復明」を唱えて集まったのが始まりとされているが，東南アジア諸国へ逃れた彼らの一部が移住先で当初の政治イデオロギーを維持していた可能性は低く，むしろその組織力と統率力を活かして，植民地政府の社会的枠組みのなかで中国人労働者をとりまとめていたと考えられる[18]。1819年にイギリスがシンガポールを植民地として獲得する以前から，中国人がすでにガンビール栽培の農園を開いており，全く新たにイギリス人が土地を開いたというわけではない。マレー半島一帯で錫鉱山がみつかったことやゴムや砂糖のプランテーションが本格化したことで，その後移民が急速に増加したのは確かであるが，その急増した中国人移民の社会的コントロールはすでに移住して農園経営をしていた起業家としての中国人でもあった。つまり，インド人労働者がイギリス植民地政府から直接の管理をされていたのに比べて，中国人労働者の場合は，植民地政府の他に鉱山やプランテーションで彼らを雇用する側にあった資本家としての中国人が存在し，彼らによる管理の他に，さらに労働者を日常

17) Yen Ching-hwang, ibid

18) 清朝成立ののち，17世紀なかばまでにすでに秘密結社の成員は政治逃亡をしてマラッカまで来ていた。そのリーダーであったのが李君常であり，のちにマラッカの中国人カピタンにまでなっている。

的に直接管理していたのが秘密結社であった。この組織の成員はすべて中国人から構成されており，植民地において中国人による中国人の管理を行っていたわけで，苦力(coolie)と呼ばれた労働者たちはイギリス植民地統治者からと鉱山やプランテーションの経営者からと秘密結社からの三重の支配を受ける構造の中にいた。

もちろん労働者から見て直接的には秘密結社による日常的な支配，管理を受けていることが主に認識されていたのであり，中国人労働者が集合して反植民地闘争を行ったり，経営者側へ搾取に対する異議を申し立てたりすることが行われなかったのもこのことに起因すると考えられる。つまりそれくらい秘密結社は植民地における労働者の管理と監督を細部にまで徹底しており，抵抗の手段や意欲さえ与えなかったということが想像される。そこで中国人苦力の移民過程に秘密結社がどのように関わっていたのかについてまず述べたい。

マレー半島西北部にあるペナンをイギリスが植民地化したのは1786年のことである。それ以来マレー半島一帯にイギリスの入植が相次ぎ，大量の労働者が必要となった。移民を排出した中国側では海外移民を禁じていたため，違法という立場ながら19世紀半ばまで自由に移民していた。しかしそういった自由な移民交易が，1840年代以降は苦力交易へと代わっていった。「coolie」という言葉はイギリス政府の記録に1840年代から登場してきたもので，中国人側からつけられた名称ではない[19]。移民交易から苦力交易へと名称とその内容が変容してきた背景には，それまで労働者を主として供給してきたアフリカ奴隷交易が1814年12月にイギリスとアメリカの間で結ばれたゲント協定によって廃止されることになり，1842年にその協定が実施されることに決まったことが影響している。ヨーロッパの植民者たちはアフリカ奴隷に代わる労働者を別のところで探す必要がでてきたため，ちょうど人口過剰や戦争などを抱えていた中国がそれに代わる供給先として目を向けられることになった。イギリス，ドイツ，オランダ，アメリカ，スペイン，ポルトガルなどの植民者たちが資本力をもって，輸送手段を確立し，東南アジアの他に，ペルー，キューバ，西インド諸島，ギ

19) Yen Ching-hwang, ibid, p. 6

アナ，モーリシャス，オーストラリアなどといった所まで苦力を送る交易を行った。1852年にはヨーロッパ資本によって福建省廈門に苦力交易センターが設立され，以降苦力交易は本格化したというのが一般的な見方である。

移民の方法にはそもそも大陸から移民先までの渡航費や滞在費を自分でブローカーに支払うことのできる「自由移民」と，それらをすべて前借りして働く「契約移民」に大別され，おもに契約移民の扱いは移民の過程すべてにおいてさまざまなブローカーたちから搾取される奴隷と同じものであった。1870年代までにポルトガル，オランダをはじめ各国が奴隷制度廃止を決めたため，中国人労働者も奴隷のような売買はしないということが原則ではあったが，現実には名称がなくなっただけで，扱いは奴隷以下であった。廈門の港においてもシンガポールの港においても苦力倉庫は植民地政府の管理ではなかったため，換気も行われない粗末で不衛生なものであった。その場所で苦力たちは就労先が決定するまでブローカーが買い付けにくるのを待たされことになっており，その非人間的な環境から苦力が逃走しないよう監視の役割を担っていたのも秘密結社であった。プランテーションや鉱山労働の宿泊施設からも脱走しないよう夜には外から栓錠がなされ，昼夜のない労働の上に拷問が繰り返されていた。このように移民のあらゆる過程に秘密結社の成員が関わっており，自由移民さえもが誘拐によって売買の対象にされ，意志に反してデリーやスマトラのタバコ・プランテーションに送られることもあった。そのためシンガポールの中国人コミュニティーのリーダーらが，1871年と1873年に海峡植民地政府に対し，この不当な扱いについての請願を出している。

現実の流れとは裏腹に1860年になってようやく清朝は自国民が商業活動や永住によって中国本国にも利益をもたらすことに関心を持ちはじめ，海外出国を認める「北京条約」をイギリスとの間で締結した。移民の扱いの質的な議論が植民地で行われている段階になって，大陸では移民の量的な許可が出されたということを考えるならば，それぞれの国の移民に関する認識の違いが見て取れる。苦力の扱いに対する請願によって，1873年に移民法令が海峡植民地で成立し，1875年には苦力交易は停止されることになった。とはいうものの，これは

表向きでしかなかったのはいうまでもない。移民法令の結果，1877年からは海峡植民地においてイギリスから現地語のできる中国人保護官を送り込み，「華民保護局」を設置し，依然続く苦力の虐待を監視したり，紛争の仲裁を行うことにした。

イギリスは間接統治による植民地支配を行っていたので，現地のマジョリティ人口であった中国人に対してもその慣習や生活について介入したり関心を示すことはなく[20]，彼らは秘密結社の統率下に置かれていた。秘密結社ははじめ砂糖プランテーションで労働者の管理をしていたが，錫鉱山が開かれ鉱山労働者の大量需要がでたため，大陸から現地へ労働者をリクルートするようになった。19世紀後期には公式には苦力交易は禁じられるが，潜在化しただけで二十世紀初期に世界恐慌で労働者需要が冷え込むまで続けられていた。

1870年代から1880年代は海峡植民地一帯で労働力需要が落ち込んだが，一方北スマトラでは換金作物の栽培に成功し，労働力需要が出て，当時一人あたり30シンガポール・ドルであった苦力が北スマトラへは125シンガポール・ドルで取引されたという記録がある。

苦力が搾取されていたのはおもに賃金構造にあった。新しく移民してきた中国人苦力は新客(sin-ke)と呼ばれ，港の苦力倉庫の所有者や苦力ブローカーや経営者，秘密結社のヘッドマンらに手数料や渡航費を返済する義務を勝手に負わされていただけでなく，彼らからギャンブルをするように働きかけられたり，普段利用する宿泊施設内にある日常雑貨店では高値で売りつけられていたりといった様々な場面で負債をつくらされるようにできていた。ヨーロッパ人が経営するプランテーションに雇用されることになっても，その契約には中国人が雇用エージェントとして介入しており，このエージェントもまた元をたどれば秘密結社とつながっていることになっていた[21]。経営者が苦力を購入するに際しては，彼ら雇用のブローカーに支払うべき契約の費用を全額苦力に負わせ，プランテーション内にある宿泊施設ルマ・クチル(rumah kecil)を使わせ，食事も

20) Abraham, Collin E. R., 1997, Divide and Rule, the roots of race relations in malaysia, INSAN, Kuala Lumpur, p. 114

21) Abraham, Collin, ibid, P. 121

すべて供給するが，結局のところこういった費用もすべて苦力が賃金のなかから返済することになっていた。病気は日常的に蔓延していたものの医療サービスを受けることができず，ブローカーたちは苦力にチャンドゥ(chandu)と呼ばれる粗悪な阿片[22]を高値で売り渡し，使うように奨励していた[23]。このように秘密結社は新客苦力の管理を請け負っていたという側面だけでなく，植民地内においては中国人移民全体を政府に代わって管理していたという側面ももっていた。植民地政府側も秘密結社が社会の安定化をもたらすもう一つの力になりうるということを認めており，海峡植民地の警部補(inspector-general)だったダンロップ（Major S. Dunlop)と中国人保護官であったピカリング(W.A.Pickering)は秘密結社を利用して社会の安定策を図ろうとして，各構成員の行動を把握するために秘密結社のリーダーたちを管理しようとしていた。

1840年代には福建，潮州，客家，広東の四つの地域それぞれの秘密結社がシンガポールには存在し，構成員は五千人から六千人であったといわれる。1850年代に入るとさらに五つの結社ができ，そのなかで福興（Hok Hin)は福建人コミュニティのなかで経済力を握る最有力秘密結社になった。あとの四つは潮州人のもので，義新(Ghee Sin)，義福(Ghee Hok)，義記(Ghee Kee)，海山（Hai San)であった。1870年代の秘密結社は，危険性の低い四つの結社に7079人，危険性の高い六つの結社[24]に11507人加入しているとされた。いずれも「会（hoey)」や「公司（kongsi)」という名称をつけており，構成員の相互協力と扶助により結束を固めていた。そしてそれを決定づけたのは彼らの独特な入会式[25]にあった。

22）阿片の使用に関しては重労働の過酷さを引き合いに出して必然であったかのように語られるが，実際にはヨーロッパ人経営者が労働者の管理目的で利用しはじめたものを，あとでそのように理由づけたということが言われている[Abraham, 1997]。

23）Blythe, 1947, 'Historical Sketch of Chinese Labour in Malaya', Jernal of Malayan Banch of Royal Asiatic Studies, p. 70

24）福建義興に3284人，潮州義興に1289人，義福に3529人，海山に1492人，義記に1128人，義新に785人であるとされた[Lee, 1991]が，さらに下部組織が細分化されて存在し，その構成員はこの数に含まれていない。

25）20世紀半ばにマレーシアのプランテーションの奥地で華人たちが多数集まり秘密結社の入会式の儀礼をしていたところを押さえられたという新聞記事があった。儀礼の所作には簡略化された点も多いとは思われるが，このような儀礼は現在も秘密結社の流れを組む寺廟でも行われている。

秘密結社の入会式は中国人の民間信仰といわれている三教（道教，儒教，仏教）合一的なシンクレティックな宗教としての「拝神（bai shen)」信仰を背景にしながら，師傅(master)の先導によって儀礼所作が構成員に伝授されていく。そこで強調されるのはまず，儀礼所作による社会的ハイアラーキーの確認である。それぞれの構成員が義兄弟の契りを儀礼のなかで結び，その証としてたとえば構成員に対立する警察や役人に手を貸さないことや法に背いたり逃亡している構成員を助けることや逃走費用を援助するためには自分の衣類や家具をも質に入れるなどといった細かな約束が交わされる。つぎに儀礼のなかでは結社内での順位の高い構成員に対して敬意と服従が作法として強要される，そのために師傅という最高権力者から呪文や茶陣，通用問答詩辭の暗唱などが課されるのが一般的である。さらに彼ら秘密結社のパトロンとなる「超自然的存在」への信仰が要求された。その対象も中国人の世界観のなかでは曖昧な位置である冥界にいると信じられている超自然的存在であり，それを結社として集団で祀り，時には霊媒に憑依する形で現れた。結社のなかでの集団決定に際しては，霊媒がその存在を憑依させ代表が相談する形で決定され，集団のコンセンサスは超自然的存在によって発現する仕組みになっていた。また，こういったパトロンとなる超自然的存在を祀る祭壇の構成や像の衣装などを見れば，帝政中国の権威を喚起させるようなシンボルが使われているということがあり，それらを目にすることで，彼ら結社の構造もまた帝国イメージを複製しているということが成員たちにも容易に理解できるように作られていた。このことによって，新しい入会構成員は結社に対するロイヤリティを視覚的に認識するという効果を持っていたとされる。[26)]

結社への加入は誰にでも開かれていたが，加入儀礼に関しては成員にしかわからない伝達事項が多く設けられており，成員間で情報が閉じられた集まりであったことと，それ故に成員間の結束は強く固められていたことがわかる。こういった成員らによってハイアラーキーな命令伝達の構造ができあがっていた

26) DeBernardi, Jean, 1993, "Epilogue : Ritual Process Reconsidered", in Ownby and Heidhues eds., Secret "Societies" reconsidered. New York : An East Gate Book

ため，苦力の管理や監視も徹底して実行することができたのであろう。十九世紀後期になってイギリスが海峡植民地の利益に関心を持ちはじめたことがきっかけで，植民地政府と秘密結社との間で利害が対立するようになり，ピカリングが考えたような共存しながら政府が彼らを利用するような状況にまでは至らず，次第に弾圧の対象となって勢力を奪われていった。

これに影響をしたのは地元シンガポールにいる中国人コミュニティから，秘密結社が中国人苦力を虐待しているので解決してほしいという請願があったことである。さらにこれだけではなく，現地のマレー人までもが中国人の秘密結社に加入しようとしていたことがある。1854年にはマレーの王(melakan)が義興に入会し，信仰していたことや，1859年にはマレーのチーフ(penghulus)の家で秘密結社への入会式が行われていたことを植民地政府が知り，秘密結社の民族を超えた勢力拡大に気づかされて，それを脅威と受け止めるようになっていった。

1869年には「危険結社抑止条例(Dangerous Societies Suppression Ordinance)」ができ，すべての結社の登録，警察への会合の届け出，知事からの許可，治安判事あるいは警察官の会合への立ち会い等が必要となったが，現実にはそれほど効果がみれらなかった。1876年には中国への送金に関わる郵便事業を植民地政府が独占しようとしているとの噂が流れ，送金の際にかかる手数料が高くなるのに反対して，二つの秘密結社が暴動を起こし，警察署を襲撃した。この事態の是非は問わずに事象だけを見てみるならば，公司という秘密結社が植民地のなかで，中国人なりの民主主義を実行し「民衆の意志を反映するエージェント」として機能している[27]と言うこともできよう。

十九世紀後期には植民地政府側から華民保護局が設置されたことによって，シンガポールに植民地政府が直接に介入してくるきっかけとなったと考えられる。彼らイギリス人の中国人労働者問題の専門家たちが秘密結社の詳細を知るにつれ，植民地権力に脅威を与える存在となりうることが認識され，結果的に

27) Trocki, Carl A., 1991, Opium and Empire : chinese society in colonial singapore, Ithaca : Cornell University Press

は秘密結社の弾圧へと至った。その過程で起こった顕著な出来事として1887年に起こった事件が挙げられる。これは秘密結社の弾圧が厳しくなってきたことに怒った中国人大工が華民保護局の所長であったピカリングに斧を投げつけたことであった。これに反応して，中国人全員に対し中元節の祝賀会の開催を禁止させることになった。そして結果的にイギリスの間接統治は終止符を打たれ，中国人労働者の管理を任せてあった秘密結社も1890年には解体を余儀なくされた。結社はその後形を変えてクラン・アソシエーションなどの会館になったり，会や公司から「社」に名称を変更し，地元の寺廟に紛れる形で存続していると考えられている。[28)]

Ⅵ　結論

シンガポールにおける中国人の社会結合を組織として見るならば，早くから疑似的な地縁や血縁組織が互助活動を行うために存在していたが，実際には移民としてシンガポールの港に到着するや，そこで待ち受けていた秘密結社の構成員との接触を避けることができず，苦力として秘密結社の支配を受けてしまわざるを得ない状況ができていた。また十七世紀以来マラッカに福建移民が定住し，秘密結社のネットワークを広げていたことも，十九世紀シンガポールでの秘密結社の展開の早さを容易にしたと考えられる。このような現地の中国人の社会組織の様態は十八世紀後期にペナンが植民地化され，中国人移民が奨励されて以来イギリスによってすでに把握されていたとも考えられる，その上で秘密結社による中国人の手で中国人移民労働者を統治させることが容認されていたわけで，こういった帝国内の帝国(imperium in imperio)[29)]という形態で秘密結社の存在が，植民地のなかで容認され，中国人の管理，監督が暗黙のうちに奨励されて，イギリスの間接統治を存続させる要因になっていた。

十九世紀後期に秘密結社は存在できなくなったものの，その後は「社」や寺廟に形を変えて，組織として存続している点についても言及しておきたい。大

28）DeBernardi, Jean, ibid
29）DeBernardi, Jean, ibid

陸で結成された当初の組織の目的から考えても，その活動内容はずいぶんと変遷してきている。「反清復明」の政治イデオロギーはとうになくなり，シンガポールに移ってきた時にはプランテーションなどでの労働者ブローカーになり，かれらの活動内容は苦力売買だけでなく，賭事の開催や売春斡旋，阿片売買など広く収益活動が行われるようになっていた。その活動の広さは，苦力に暴行を働いて監督していたという組織の末端構成員の行動から，ブローカーとしての活動から得た収益金を上層部の構成員が社会奉仕活動へと振り分けたり病院経営などに使ったり，社会的な名誉称号をもつメセナの実践家として振る舞う幹部の行動にまで至る。

現在も組織は変容しつつも存続し，大規模なものなら数字2桁で組織名を名乗り，さらに個々の下部組織は数字3桁で名乗っている。下部組織の活動内容は多様でときには些末な仕事も請け負っているが，その上部組織の活動内容は社会貢献に発展するものまでをも含むようなことがあり，不明な点が多い。

ただ，こういった組織の存続の形態に着目するよりも，組織に入っていく側からもう少し考えてみたい。19世紀における「帝国内の帝国」の存在は，植民地経営側と秘密結社との対立という構図になっていたが，第二次世界大戦以降とくに1960年代以降はシンガポール国家と秘密結社との対立に変わっていっただけで，植民地が国民国家に代わっただけといえよう。そこで，秘密結社が存続した理由を考えるならば，移民労働者が上陸した際に一番最初に出会わなければならなかったのが，秘密結社の成員であったからなのではなく，身柄の保護や仕事の斡旋などを地縁や血縁に限らず誰にでも入会をオープンにしていたからであろう。そのことが入会するものにとっては，平等に開かれた社会結合の一つの選択肢として受け止められたと考えられる。これが現在に至っては霊媒の寺廟における活動にみる公開性や誰でもが霊媒に相談できる平等性とパラレルであると言えるのではないかと考える。

Chinese Social Organization in Singapore : from the Straits Settlements Era until the British Singapore Era

Fukuura　Atsuko

This paper examines the evolution of Chinese social organization in Singapore from the straits settlements era until the British Singapore era. In these eras British colonial government turned her colonial policy to Singapore, in early 19th century British colonial government carried out the indirect reign, around early 20th century it was the height of prosperity for rubber plantations and the tin mine industry in Singapore, the colonial government changed her policy to the direct reign. Under the rule of the indirect reign, each ethnic group governed themselves except the Indian, which was ruled over direct policy by the British government,for the Chinese coolie labor, the plantation owners were Chinese and tin mine owners were also Chinese. They governed Chinese coolies. And there was another ruler, it was secret society in Singapore, they concerned with Chinese coolies in many and minute dimension, the recruitment of the labor in the mainland China port, the searching of work for coolies in Singapore port, and the control of the coolies in the working place, etc.

In this paper I examine the Chinese organization from three sides, Chinese association, Chinese spirit medium temple, and secret society. One may say, however, clan association or professional guild association and Chinese temple were completely different. In particular, the association limited their membership rigidly. But I think it is impossible to stratify Chinese for class, literacy and professionals, etc. The combination

of factors were dynamic and complicated, sometimes Chinese organizations change their form and structure for survival.